

同郷団体の活動と集住地区
——神戸における徳之島出身者の定着過程をもとに——

中西雄二*

Activity Development of Native-Place Associations and Settlement Area of Domestic
Migrants: A Case Study of Migrants from Tokunoshima Island in Kobe

NAKANISHI Yuji*

Abstract

This paper focuses on the settlement process of domestic migrants from Tokunoshima Island, a part of the Amami Islands, to Kobe through the practices of native-place associations. I define the Amami Islands as Japan's borderlands based on its historical background.

Migration from Amami including Tokunoshima Island to Kobe significantly increased in the beginning of the 20th century. Many people initially migrated to mainland Japan as unskilled workers at industrial areas. With a large number of people from Tokunoshima Island, several native-place associations began to flourish in this area after the 1920's. In addition to this began the formation of cross-regional networks based on community ties or kinship.

After World War II, Amami went under the US military rule between 1945 and 1953. During this period, native-place associations of Amami migrants carried out more specific activities compared to the pre-war period, and began to have functions specific to this period. First, these native-place associations assisted fellow islanders with formalities required for travelling to Amami. Second, they used their good offices to distribute supplies to Amami migrants. And third, they led the Amami reversion movement which started in the 1950's.

After the reversion of Amami in 1953, a great number of people emigrated from Amami where people were suffering prolonged economic hardship, and the number of people migrating to mainland Japan to work rapidly increased. Chain migration continued even after 1953, and mass employment was also arranged through personal connections to large-scale factories of large companies.

These characteristics also affected the spatial distribution of migrants from Tokunoshima Island. The spatial distribution of migrants from Tokunoshima Island in Kobe tends to concentrate in the areas adjacent to coastal industrial zones. This trend has been found since the pre-war period and

* 東海大学文学部: School of Letters, Tokai University, 4-1-1 Kitakaname, Hiratsuka, Kanagawa 259-1292, Japan / nayuj@tokai-u.jp

continues to the present days.

In addition, the spatial distribution of migrants from Tokunoshima has different characteristics depending on the elementary school district where they came from. Native-place associations of elementary school districts play a central role in the activities of today's associations of migrants from Tokunoshima. Then, the focus of today's native-place associations is on symbolic activities, that is, cultural activities involving ethnic symbols such as traditional dances and folk songs. In recent years, these activities are expected to perform a function to maintain the identity which is waning especially among the younger generations as well as the bond among fellow islanders.

キーワード：同郷団体、徳之島出身者、境界地、奄美、神戸

Keywords: Native-place association, Migrants from Tokunoshima Island, Borderlands, Amami, Kobe

はじめに

松本[1969]や祖父江[1969]を嚆矢とする日本における同郷者集団研究は、都市空間を様々なルーツをもつ人々のモザイク的集合として捉えることで、その多様な社会空間のあり様を明らかにしてきた。特に、同郷団体の有する人的ネットワークや諸実践に目を向け、都市移住の際に同郷者の出身地と移住先との間の結節として機能する同郷団体の役割を明示し、新天地での地方出郷者らの様々な定着過程を提示してきた[松本・丸木 1994; 鯨坂 2009]。そうした一連の諸研究のなかで、エスニック集団研究との関連で注目されてきたのが沖縄や奄美といった国民国家の境界地 *borderlands* の出身者の事例である。

本稿で取り上げる奄美は、かつて琉球王国の版図にあったものの、17世紀には薩摩藩に征服されて過酷な搾取を受けた歴史を有する。また、日本に包摂された明治維新後は鹿児島県に属しながらも、財政上は県から切り離される「独立経済」を1889年から1940年まで強いられ、不安定なモノカルチャー経済のもと、深刻な貧窮状況に直面した[西村 1993]。そして、第2次世界大戦後には北緯30度以南の沖縄や小笠原同様に日本「本土」から行政分離され、サンフランシスコ講和条約発効による日本の主権回復後も、1953年末までアメリカ軍政下に置かれるなど、文化的差異やポストコロニアルな状況が顕在化してきた地域である。

戸邊[2008]は1990年代から盛んに蓄積され始めてきた近代日本の植民地研究を振り返り、「植民地支配によって離散を余儀なくされた人々（ディアスポラ）の移動と定住の諸相、越境的な生活圏、定住先の権力との交渉や抵抗」の実態を解明する試みに、ポスト・コロニアルな状況に置かれた人々の研究の可能性を見出している。筆者は境界地に関する研究においても同様の可能性を肯定的に捉えるとともに、ナイーブな同化理論に陥穽することを避け、マー

ジナルな位相にある、またはあった沖縄・奄美出身者の状況をコミュニティやアソシエーションの諸実践から動態的に捉える枠組みのなかで明らかにしたいと考える。

その上で、国内移民としての「移動」に伴う定着過程を分析する際に無視できないのが、近年の「新しい移動パラダイム」、または「移動論的転回」と呼ばれる研究の方向性である。これは国家やネーション、コミュニティやエスニシティといったものを、静的な範疇によって規定されるものとして進める従来の人文社会科学に対する批判として、事象の流動性や移動そのものに焦点を当てようとする考え方である [Urry 2002; Blunt 2005 など]。移民研究は人の移動をめぐる最も重要な主題であり、コミュニティやネットワークを動的なものとして考察する必要性が、以前から指摘されてきた研究課題である。そのなかで、移動論的転回の影響を受けた研究では、出身地と居住地の相互作用、特にその両者を双方向的に移動したり、架橋したりする動態的な生活基盤のあり方に注目してきた [Blunt 2007]。この出身地と居住地の間を接続する形態のことを Conradson and Latham [2005] は「移民の中間化 middling」と呼び、他の同郷者とのネットワークや物理的に離れた地域に生活する家族との親密な関係性に注目する視角を提示している。

また、「新しい移動パラダイム」に含意される流動性には、出身地と居住地のどちらにも属す、または属さない移民の弾力性のあるアイデンティティの動態性も含まれる。ここで考慮すべきなのは、移民の帰属意識の基盤となるホームへの注目である。一連の議論を展望した福田 [2008] の整理によれば、移動論を踏まえたホームの研究には、①社会的な過程で動的に形成されたホームをめぐるポリティクス、②ホームを位置づけるスケールの問題、③ハイブリッドな主体形成を生じさせるルーツとルート存在、④ホームの空間的ポリティクスと女性の関係性、⑤集合的記憶とホームの共有、といった論点からホームとアイデンティティの相互関係が問い直されている。ここで用いられている「ホーム」には単なる「家庭」という意味のみならず、アイデンティティや生活の基盤たる「本拠地」といった意味も含まれる。

これらの論点を移民研究の研究課題に引きつけて考えれば、従来の固定的で本質的なものとしてのホームの捉え方を否定し、物理的な出身地／移住地だけではなく、象徴的で想像されたホームへの帰属意識や複数のホームを持ち得る移民の諸実践に着目し、コミュニティやエスニシティをめぐる動態的な過程を多角的に捉えることを重視する視点である。移動を経験した地方出郷者が、出身地と「第二の故郷」としての居住地との相互作用の中で構築していく「故郷」に対する表象を分析した川村 [2015] は、そうした視点を同郷団体研究に応用したものといえよう。

「本土」在住奄美出身者に関する既往研究を展望してみると、出身者と出身地との間の密接な経済的結びつきを明示した安斎ほか [1981・1982] や田島 [1990, 1991]、それに同郷団体活動の参与観察から「郷土」に対するノスタルジックな感情を喚起させる機能に注目した

小林 [1986, 1987, 1994] など、都市社会学における同郷者集団研究の潮流の中で、対面的な関係性が構築されやすい集落単位の同郷団体の諸実践を参与観察などを通して分析されたものが多い。だが、その「移民の中間化」に近い機能や、ホームとしての「郷土」への場所感覚に注目した問題意識は、いずれも先に触れた移動論的な研究との親和性が高い事例研究であるといえる。

その一方で、前述した奄美が有する国民国家内部における周縁性やポストコロニアルな状況を見逃して奄美出身者の「同郷性」に基づく諸実践やアイデンティフィケーションを語ることはできない。戦前期における沖縄出身者を扱った富山 [1990] は、労働市場に包摂されていく中で、差別的な構造化に伴って「沖縄人」という標識が構築されていく過程を批判的に明らかにした。同様に、西村 [2006] は阪神大都市圏における奄美出身者について、「半日本人」というカテゴリーの中で様々な回路を通して移住地の社会に適応していった過程を提示した。また、水内 [2001] は沖縄出身者の社会的、経済的周縁性が空間性を帯びて表出し、行政によって不良住宅地区として規定された集住地区の生活状況や、「改良」の名目でクリアランスされていく過程を詳細に描いた。

これらは戦前の奄美出身者全体を包含する同郷団体の形成過程を「エリート層」の言説から分析し、同郷者の「修養」や「同化」を志向する実践に伴って「奄美」という想像の共同体が構築されていったことを示した中西 [2007] とともに、日本「本土」＝ヤマトとの歴史的な文脈における多くの差異を前提として、その社会的に構成された周縁的位相の構築過程やそれへの境界地出身者の両義的な対応を、「沖縄」や「奄美」といったカテゴリーに焦点を当てて明らかにしたものである。このような近代化のプロセスの中で、いかに奄美出身者の位相が構築され、そして変容していったのかという文脈を踏まえた上で、同郷団体活動を分析する姿勢が奄美の同郷団体研究には必要不可欠なのである。

以上の視座に基づき、本稿では戦前から奄美出身者の集住地区が形成されてきた神戸における同郷団体活動を事例として、多数派社会との関わり合う中でなされてきた同郷団体の諸実践に着目し、時代ごとの社会的文脈の変化に伴って同郷団体の機能や「同郷性」がいかに変容したのか分析していく。具体的な事例としては、戦前からの活動が認められ、現在も複数の同郷団体が神戸市西部の集住地区を中心に活動を続けている徳之島出身者を取り上げる。

神戸においては徳之島出身者と沖永良部島出身者が人口の上でも、同郷団体活動の活発さにおいても奄美出身者の二大勢力とされてきた。いずれも神戸奄美会という「奄美」全体を包含する団体の中心的な構成メンバーを占めており、「奄美」というカテゴリーの中では同郷者として歴史的に協働してきたのである。その一方で、「奄美」というカテゴリーが構築されていく過程では、出身の島や地域が異なることで様々な差異が生じうる。後述するが、奄美出身者の同郷団体は奄美全体、市町村、小学校区、集落といった異なるスケールごとに存在し、

それらが入れ子状の構成となっているため、出身者が基盤とする地域のスケールごとの差異にも注目する必要がある。「奄美」や「沖縄」というカテゴリーが対他的に構築されていったように、奄美内部の島単位の「同郷性」がどのような展開を見せていったのか、「本土」、「奄美」、そして奄美における複数の島や集落との差異にも注目して、多層的な奄美出身者の「同郷性」を再考することを本研究目的の要諦に据える。

資料については、まず1925年末に創刊され、1944年に休刊しつつも1946年4月に再び復刊されて1991年まで鹿児島市の奄美社によって発行されていた『奄美』（1927年6月までは『奄美大島』）という出版物を用いる。この雑誌は奄美に関する社会評論のほか、全国各地における同郷団体活動の取材記事や同郷者からの寄稿記事が数多く掲載されており、それぞれ時代の奄美の社会情勢や同郷団体活動を知る極めて貴重な資料となっている〔中西2008〕。この資料に記載された記事や寄稿文から、主に現存する資料が少ない戦前期や第2次世界大戦直後の同郷団体の活動や集住地区の状況を検討していく。

第2次世界戦後の事例については、主に現存する同郷団体が発行した名簿や記念誌などの出版物を用い、そこに記載された記述やデータから同郷団体の活動内容や会員世帯の居住分布を分析し、歴史的な文脈を踏まえた同郷団体の特徴と集住地区の様相の考察を行なう。

さらに、同郷団体活動への参与観察や徳之島出身者への聞き取り調査によって得られたデータも重要な資料として分析対象とする。また、それぞれの時期の社会的な背景や移住地の多数派社会の言説を探るために、関係する新聞記事や行政資料も側面を補うものとして扱う。それらの資料をもとに、20世紀初頭からの徳之島出身者による同郷団体の生成期、第2次世界大戦後に奄美がアメリカ軍政下に置かれた時期、そして奄美返還から現在に至るまでの時期について長期的な変化を明らかにし、奄美出身者がいかに変動する社会状況に対応したのか、同郷団体の活動を事例として解明を試みる。

なお、本稿における奄美という語は、現在の鹿児島県大島支庁管内の喜界島、大島本島¹⁾、徳之島、沖永良部島、与論島からなるいわゆる奄美群島と称される地域を指す。

I 徳之島から神戸への移住と定着

徳之島を含めた奄美から神戸への人口移動は、第1次世界大戦の頃から顕著になった。この時期は阪神工業地帯での重工業化が急速に進展したことに伴って、労働市場も拡大していった時期である。同時期の神戸では1910年代中頃から始まった「西神戸耕地整備事業」が展

1) 便宜上、本稿では一般的に奄美大島と称される大島と近接する加計呂間島、請島、与路島の4島の総称として、大島本島という語を用いる。これは神戸における奄美出身者の同郷団体での呼称に依拠したものである。

開されていく。これは工業化とともに急激に進展した神戸の市街地拡大を受けて、神戸西郊の農地で進められた区画整理のことである。この事業によって幅員のある道路で基盤の目状に区画された林田区²⁾南部一帯は、住宅や商店街を新しく整備するのに絶好の地域として、1920年代には「西新開地」と呼ばれる西神戸随一の繁華街が形成されるまでになる〔水内・加藤・大城 2008: 146-150〕。そして、慢性的な経済的困窮にあえいでいた奄美から新天地を求めて神戸へ渡った人々の中でも、特に徳之島出身者がこの地域一帯に移り住んでいったのである。

当時の状況について、「神戸特輯号」として発刊された『奄美』1926年10月号に「神戸市及びその近郊には郷土同胞が八千から居り、大阪同様職工、労働者階級の人達はその大部分を占めているとの事である」³⁾との記述があり、一定数の奄美出身者が定着していたことがうかがえる。さらに、その8年後に「阪神特輯号」として発行された『奄美』には、より詳細な以下の記述がみられる。

神戸の街頭に立てば必ずや東神戸に於て沖洲人、西神戸に於て徳洲人の姿をみざることなく、大阪は広い丈に神戸ほどには目につかないが、それでも東西淀川区の工場地帯を始め港区方面に於てはよく徳、沖人（筆者注：徳之島出身者、沖永良部島出身者の意）を始め郷土同胞に接せざるはなく、若しそれ沖縄大島航路船の出入の際における阪神築港方面は郷土旅客及送迎人を以て埋め、恰も郷土の延長の如くその盛況は鹿児島埠頭などには到底見ることが出来ない。（略）街頭前線に活躍せる一萬同胞の大多数は工場に働く若き男女同胞で、海員之に次ぎ、電車、自動車乗務員又之にその他各方面に拡がつておる。工場は鉄工場、紡績工場、染工場、ゴム工場を主とし…。⁴⁾

記事中の「沖洲人」とは沖永良部島出身者を、「徳洲人」とは徳之島出身者を指すことから、既にこの時期に奄美出身者の集住地区がそれぞれ出身の島ごとに形成されていたことがうかがえる。そして、これらの集住地区の形成は、主に川崎財閥や三菱財閥に代表される特定の大工場や、林田区一帯に集積していたゴム関連工場への縁故就職に伴う連鎖移住が背景にあった。その結果、徳之島出身者の集住地区となった「西新開地」の六間道商店街は、「徳之島銀座」と呼ばれるまでになったという⁵⁾。

神戸で生活する同郷者が増加してくると、しだいに神戸では奄美出身者による同郷団体活動も活発化していく。そのなかでも、特に活動が盛んだったのが上の記事にも言及されてい

2) 林田区の範囲は、現在の長田区と兵庫区南部を合わせた区域とほぼ重なる範囲である。

3) 『奄美』1926年10月号、13ページ。

4) 『奄美』1934年11月・12月合併号、6ページ。

5) 『月刊奄美』1998年4月20日号、南海日日新聞社。また、筆者の聞き取り調査においても確認された。

る沖永良部島出身者と徳之島出身者であった。雑誌『奄美』に掲載された記事⁶⁾によれば、最も早くからの活動が確認できる徳之島出身者の同郷団体は神戸亀津青年会で、創立は1921年10月とされる。この団体は旧・亀津村の中心部にある亀津集落の出身者によって結成されたもので、定期的に運動会や家族慰安会といった行事を開催していた⁷⁾。

1927年5月に林田区に隣する須磨区の妙法寺海岸で開催された「春季運動会」の様子を伝える『奄美』1927年6月号によれば、「出席会員二百七十名、会員家族及び同郷出身の観衆無慮二千といふ盛況」で、運動競技のほかに徳之島の伝統芸能である「棒踊」や「青年相撲」が行われ、「相撲が始まる頃から、観衆は各自携ふる所の行厨を抜き、献酬漸く重なるに従つて、郷土気分満場に漲り、歌舞管絃に交つて歓声湧くが如く、暮靄の既に迫るをも知らぬ有様であつた」⁸⁾。翌年春に開催された同会の運動会でも、同様に「余興としては、各種運動競技、青年相撲があり、観覧中例に依つて開宴、一方では蛇皮線の音に歌い舞ふの大はしゃぎを演じて日没後散会した」⁹⁾という。

このような行事には、故郷を離れた出郷者にノスタルジックな感情を想起させる機能も期待されていた。その一端は、1929年10月の運動会の様子を伝える『奄美』の記事に垣間見ることができる。

角力が終ると南国情緒のみが持つ事を許された八月踊である。(略)夕暮れに淡路島は幾んど淡くわが太平洋で囲まれた亀津の永濱を思はせるに充分であつた。(略)人々はどんなに又の運動会の集合を楽み待つて一杯であつたらうか。青年らは又働くのだ。そうして又楽しむべき日は屹度来るのである。斯様にして第二の故郷の神戸が青年らに依つて征服されつつあるのである。¹⁰⁾

「創立以来毎年春秋二季運動会を催し体育奨励と会員の親睦を謀つて来た」同会は、1931年時点で300余りの会員世帯を擁する規模となる。その頃には「吾が在神亀津青年会の運動会は逐次隆盛を極め西神戸一の名物にさへ数へられて来た」とされ、同年に開催された運動会では「会員家族を挙げて昼食持参一種一瓶にて終日楽しみ酔ひの廻るにつれ、所々に唄声湧き男女年寄り連中は運動会は吾々年寄の躰をのばして呉れる唯一の機関であるとして大満悦であつた」という¹¹⁾。

6) 『奄美』1934年11月号、19ページ。

7) 前掲6)、19-20ページ。

8) 『奄美』1927年6月号、15-17ページ。

9) 『奄美』1928年6月号、17ページ。

10) 『奄美』1929年12月号、14-16ページ。

11) 『奄美』1931年7月号、22-24ページ。

こうした同郷者間の親睦を進めたりノスタルジーを喚起したりするような活動は、亀津出身者だけではなく、徳之島の他の地域出身者のなかでも盛んに行われていた。例えば、1927年には前述の妙法寺海岸で旧・東天城村出身者による神戸東天城郷友会と旧・亀津村の井之川集落出身者による神井之川青年会の合同発会式が開催され、大島本島出身の弁護士などを含めた奄美出身の来賓が臨席した式典と「聯合運動競技会」が執り行われた。出席会員はそれぞれ神戸東天城郷友会が125名、井之川青年会が85名であったが、会員家族や非会員の同郷者を含めた約1500人の観衆を集め、「婦人や幼少までも大乗り気になって参加された為め、曾て見ざる盛況裡」であったという¹²⁾。

一方で、戦前における奄美出身者の同郷団体を語る上で無視できないのが、親睦だけではなく、同郷者の「修養」や「生活改善」を志向する活動である。これは同時期の「本土」在住沖縄出身者にもみられた傾向であり〔富山1990〕、移住地で文化的差異や経済的困窮などを背景として他者化された経験に対する反応として捉えることができる。実際に、戦前の神戸では神戸奄美会というエリート層を中心に結成された奄美全域を包括する同郷団体が、非エリート層の同郷者に対して「修養」や「本土」における都市部への「同化」を奨励する活動を行っていた〔中西2007〕。神戸奄美会の結成に関わった人物が『奄美』に寄稿した次の文章は、そうした活動の背景となる奄美出身エリート層の認識が明確に示されている。

関西に於ける郡人の意気揚らず至る処不評判を重ね居り吾々はその禍中にありて苦闘致し居り候吾々は多年郡民の社会的地位の向上と困憊せる郷党の復興を図る所以の途は青年の精神の復興にありとの信念の下に自らも努力し、他にも主張致し来り候幸にして近来在神同郷人の間に団体の結成に依りて自他相刺激し相扶けて個人の充実と郷党人の信用挽回を図らんとする機運大いに起り、(略)在神奄美出身者の大聯盟を結成せんとする¹³⁾

そして、「祖先伝来の無為退嬰の悲観思想を放擲して雄々しくも社会の不信用のどん底にある関西而も其の最たる神戸に於て同郷人の活躍を打開し世人の不信を挽回し更に困憊の極にある郷党の復興に寄与」¹⁴⁾することが神戸奄美会の設立目的であるとされた。

だが、同様の志向は神戸奄美会だけではなく、徳之島出身者の同郷団体においても認められた。詳細な結成年は不明ながら、1930年代に活発な活動を神戸で行っていた神戸徳州同志会という徳之島出身者全体を包括する団体は、「青年の智識啓発、思想善導、風紀の改良と郷

12)『奄美』1927年7月号、25-26ページ。

13)『奄美』1931年2月号、14ページ。

14)前掲13)、15ページ。

人指導」を目的に弁論部を組織し、同郷者の「修養」を積極的に勧めていた。この神戸徳州同志会は「労働争議には絶対参加せぬ労資穏健な団体」を標榜し、労働運動を好まない工場主から寄付金を申し込まれるほどであったことから、ここでいう「思想善導、風紀の改良」が目指す方向性は穏健で従順な「よき労働者」であったことがわかる。この活動により、「是れ迄好意を以て迎へられず失業に悩み居りし徳州人の使用も漸次多くなり会員失業者の影が消えてい」ったと同郷者の間では捉えられていたという¹⁵⁾。

同会弁論部によって1931年3月に開催された「弁論部雄弁大会」では、会長による郷土視察報告のほか、奄美に関する経済、産業問題、交通政策、さらには飲酒抑制の奨励や「大島に於ける貧民生活の悲惨なる状態を弁論し其救済を絶叫」するものなど、多岐にわたるテーブルスピーチが繰り広げられた。なお、夕刻に始まった上記の雄弁大会であったが、この日の様子を記した『奄美』の記事には、「時に拾時半、聴衆場外に溢れて無慮五百朝鮮人が数名居ったのも珍しい」との記述もみられた¹⁶⁾。会場となった浜添通公会堂がある林田区浜添通周辺は、川崎財閥系の大工場に近接する住工混在地域である。この一帯は徳之島出身者の集住地区であるとともに朝鮮半島出身者の集住地区も重なり合っている地域であり、この記事から徳洲同志会の行事に近隣の朝鮮半島出身者が参加していたことが確認できる。だが一方で、そのことが「珍しい」と述べられていることから、両者間の同郷団体を介した頻繁な接触が余りみられなかったことも推測される。

加えて、この時期の徳之島出身者の活動を考える上で無視できないのが、先の雄弁大会でも議題に挙げられていた奄美の交通政策、とりわけ阪神地方との間を結ぶ航路問題である。従来から大阪商船が独占的に運営していた沖縄奄美航路について、奄美の住民や出身者からはこの航路で用いられていた船舶が大型船ではなく手狭な上に、老朽化しており、にもかかわらず運賃が割高であることに不満が表明されることが多かった。さらに、その奄美での寄港地が中心都市である名瀬に限定されていたことから、大島本島以外の利用客には非常に不便な状況が続いていた。そうしたなか、1930年に神戸在住の奄美出身者が設立した川畑汽船という会社がこの航路に参入し、従来の船よりも大型の船舶・平壤丸を就航させるとともに、徳之島を含めた離島にも寄港するようになった〔前橋 2004: 217-220〕。この状況は「二十万郡民が多年声をからして絶叫した一千噸級優秀船の回航を突如として断行した我が南海の航運界に、一大衝撃を与え」、「孤島苦、交通苦に悩める吾ら、憎らしい独占会社の横暴に憤怒せる吾らは、実に此の快挙の出現に対しては無限の感謝無限の感激を禁ずる能はざるもの」として捉えられた¹⁷⁾。

15)『奄美』1931年8月号、16-17ページ。

16)『奄美』1931年5月号、11-12ページ。

17)『奄美』1930年11月号、41ページ。

実際にこの平壤丸に乗船した奄美社の記者による『奄美』1931年1月の記事には、その利用客の様子が描かれている。

阪神帰りの客三百六十余名とはいかにも賑やかな事で、この乗客の大部分は徳之島と永良部（沖永良部島の意：筆者注）行だといふ。従前ならばこれらの客は阪神鹿児島通ひ、又は阪神名瀬通ひの船で運ばれ、鹿児島又は名瀬に於て各島通ひの船に乗換へてみたのであるが、平壤丸の廻航以来この乗換の時日と経費が省かれたので此所に離島旅客の大福音は齎されたのである¹⁸⁾。

しかしながら、就航当初から大阪商船が対抗策として実施した大幅な値引きなどにより、もともと資本力の弱かった川畑汽船の経営状況は悪化した。これを受けて、神戸在住の徳之島出身者有志が、複数の同郷団体のリーダーらに協力を仰ぎ、神之嶺、井之川、徳和瀬、亀津、東天城といった地区出身者による「在神徳之島各青年会聯合後援演説会」として、林田区内の大橋公会堂と吉田公会堂の2か所で「平壤丸後援演説会」が開催された¹⁹⁾。

このように、当時の徳之島出身者は郷愁に浸りながら親睦を深める活動のほか、弁論活動などを通じた同郷者の「修養」や「指導」、そして出身地と居住地を結ぶ航路の改善運動という直接的に生活と関わる問題への政治的な言論活動を行っていた。それぞれ同郷性の確認や精神的慰撫、多数派社会からの他者化への対応、出身地の現実的な地理的不利条件の緩和を目指した同郷団体の道具論的活動であると指摘できるが、いずれの活動も出身地と現住地との間で生活する徳之島出身者にとって、新天地での定着過程における適応機能を果たすものであったといえよう。

II 終戦後の同郷団体

1938年の国家総動員法施行で民間団体の自由活動が禁止され、さらに戦時体制が強化されていくと同郷団体活動は停滞の期間を迎えることとなる。だが、1945年の終戦後、特に1946年2月2日に奄美の行政が沖縄や小笠原同様に「本土」から分離されてアメリカ軍政下に置かれた「行政分離」以降、突如として奄美出身者の同郷団体活動が活発化していく。なかでも、戦前から徳之島出身者の集住がみられた長田区と兵庫区の南部一帯はこの時期においても徳之島出身者を主とした奄美出身者の活動拠点地域として、様々な同郷団体の再結成が行われていった。

18)『奄美』1931年1月15日号、16ページ。

19)前掲18)、19-21ページ。

まず、神戸において最初に結成された組織が奄美連盟本部神戸支部である。この組織は既に尼崎で1945年10月に結成されていた奄美連盟本部との合流を視野に、同郷者の保護と「行政分離」された奄美への帰還を希望する同郷者への支援を目的として1946年3月に設立された²⁰⁾。その拠点は当初、兵庫区御崎町の会員宅に置かれるが、後に長田区二葉町にある真陽小学校に隣接した空き地を借り受け、そこに建てられたバラックのなかに置かれた。この地域は戦前から徳之島出身者の集住地区であり、このバラック自体は同郷の引揚者向けの住宅として建設されたものであった〔神戸奄美会 1990: 150-151〕。

なお、この組織化の背景には台湾出身者とのコンフリクトがあったとされる。神戸奄美会が発行した『奄美復帰30周年神戸奄美会記念誌』によると、徳之島出身者が郷里から確保した黒糖を神戸で台湾出身者に奪われるという出来事があり、そうした状況に対処するための自警団的な組織として同郷団体の再結成を求める動きが生まれたのである〔神戸奄美会 1983: 18〕。

神戸で奄美連盟が組織されて間もなく、尼崎の奄美連盟総本部など他の団体とともに奄美連盟兵庫県連合会が結成された。1946年4月14日に開催されたこの団体の結成式は徳之島出身者の集住地区に立地する兵庫区吉田国民学校で開催された。この際には約5,000名の参加者が会場に押し寄せ、組織の役員を選出や規約の決定などの後に、「演芸大会を催ふし、戦災後娯楽に飢えた同胞は懐しの民謡に朗かな歌舞に吾を忘れて歓び」幕を閉じたという²¹⁾。なお、この年のうちに奄美連盟の本部事務所は神戸の中心市街地である三宮に移動するが、長田区に置かれていた旧本部事務所は引き続き奄美連盟西部支部事務所として利用され、会員への生活物資の配給や優先的な販売などが行われていた〔神戸奄美会 1983: 20〕。この真陽小学校付近の一角は、奄美返還後も「レンメイ」と呼ばれ、多くの奄美出身者、特に徳之島出身者が集住する場所として知られることとなった²²⁾。

こうしたなか、奄美連盟兵庫県連合会は1946年12月に奄美連合兵庫県本部と改名し、事前に東京で発足した全国奄美連合総本部の兵庫県下における下部組織となった。そして、1951年には奄美連合の全国組織による全国復帰対策委員会の設置が決定し、神戸でも奄美大島日本復帰対策兵庫県委員会が奄美連合を中核として発足した。ここに活発化する「復帰運動」では様々な集合行為での決議文や嘆願書において「奄美」や「鹿児島県大島郡」の一体性や「沖縄」との差異が強調される形で展開されていった〔大橋 2005; 中西 2016〕。

だが、復帰運動が展開された具体的な場所に目を向けると、奄美出身者内部の微妙な差異

20)『神戸新聞』1946年3月10日。

21)『奄美』1946年6月15日号、1ページ。

22)「レンメイ」という呼称の由来については、奄美出身者のなかでも「奄美連盟」以外に由来するという異論もある。なお、現在では奄美出身者の集住地区という特徴は薄れ、一角は空き家や空き地が増えつつ一方で、ベトナム系住民など新たな居住者の流入もみられる〔稲津ほか 2013〕。

も垣間見ることができる。鹿児島県立奄美図書館所蔵の『大島郡全諸島完全復帰兵庫県協議会資料』に記載された1952年時点での兵庫県委員会構成メンバーを確認すると、88名の委員のうち、少なくとも37名が徳之島出身者で、他島出身者と比べても最大勢力となっていた。加えて、居住地別でみると、最も多いのが20名の長田区在住者で、そのうち12名が徳之島出身者となっており、長田区在住の徳之島出身者が同委員会のなかでかなりの勢力を占めていたことがわかる〔奄美大島日本復帰協議会1953〕。また、「復帰運動」に先立った奄美連盟に端を発する同郷団体の活動拠点の1つとして、長田区や兵庫区といった徳之島出身者の集住地区周辺が重要な場所であったことも前述した。

だが、同委員会の発足後、全国復帰対策委員会が関わる行事以外で神戸において独自に行われた集合行為は、その大半が神戸市東部の灘区や旧・葦合区での開催であり、兵庫区や長田区で大々的に集会などが開かれることはほとんどなかった。この背景には1952年9月に起きたいわゆる「二島分離報道」が関係している。「二島分離報道」とは、複数の新聞社が奄美の施政権返還が近く実施されるものの、それは北緯27度半以北、すなわち徳之島以北に限定される見込みであると同月末に報じたことを指す²³⁾。この報道によって北緯27度半以南の沖永良部島と与論島で動揺が広がり、「本土」在住の両島出身者にもその懸念が共有されたことで、神戸においてはそれまで以上に活発な集合行為が展開されていった。

そのため、神戸では沖永良部島出身者を中心に同島出身者の集住地区周辺の小学校や同島出身者らの寄付で戦後に建設された神戸沖洲会館という施設を会場に、「二島分離報道」から1953年12月の奄美返還までの間に主なものだけで7回以上の集会や陳情報告会などが開催された。しかし、それらの集合行為では沖永良部島出身者が主体で、復帰対策兵庫県委員会に名を連ねていた徳之島出身者の参加はほとんどみられず、神戸市西部での集合行為も盛んに行われることはなかった〔中西2016: 17-21〕。結局、「二島分離報道」は誤報であったとされているが、この際に焦点化された「北緯27度半」をはさみ、同じ奄美出身者の中に出身島ごとの温度差が存在したのである。

なお、1953年12月25日に奄美の施政権が日本政府に返還されると、奄美連合兵庫県本部は神戸奄美会に名称変更し、同郷者間の親睦を活動の主とした団体を志向していく。

III 奄美返還後の同郷団体と集住地区

1 同郷団体と同郷者ネットワーク

奄美返還によって、同時に日本「本土」と奄美の間での渡航も自由化され、人々の移動も

23) 最初に報じた『毎日新聞』は1952年9月27日付朝刊においてこの件を伝え、それを追う形で奄美の名瀬で発行されている『南海日日新聞』が同月30日付朝刊で「復帰は徳州以北」と報じている。

急激に活発になっていった。1950年以降のいわゆる朝鮮特需によって需要が急伸した造船業や鉄鋼業などが盛況を呈したこともあり、神戸への就職を契機とした移住者が急増した。1953年に奄美労務事務所が実施した調査では、奄美返還後に約2万人に上った「本土」での就職希望者のうち、約1万7,000人が阪神地方での就職を希望していた²⁴⁾。『神戸市統計書』によると、1950年代半ばから1960年代半ばにかけて、鹿児島県から神戸市への転入者は兵庫県に隣接する大阪府からの転入者に次ぐ規模であった。その後、鹿児島県から神戸市への転入者数は1970年頃まで毎年3,000人前後で推移する。

同郷者の増加が続き同郷団体活動が盛んになったこの時期には奄美出身者の同郷団体が多く設立されている。例えば、神戸神校会という旧・亀津町の神之嶺小学校区出身者の同郷団体は、従来の同郷団体を再編成する形で1954年に結成された[神戸神校会2005]。なお、返還後の神戸における同郷団体の主体は、「校区会」と呼ばれる小学校区単位の団体が担うこととなる。これら「校区会」は戦前から存在していたが、先述したように戦前の「青年会」を名乗った同郷団体の多くは、より小さなスケールの字単位の同郷団体であった。しかし、戦後は複数の字を包含した「校区会」が重要な役割を有するようになっていく。これは字単位よりも規模が大きく、参加する人的規模や財政的基盤を維持しやすいとともに、同じ学校の卒業生が主となる同窓会にも似た対面的な関係性をもとにした会への参加促進が可能なことによる。

こうした状況のなか、これら複数の同郷団体をまとめる連合組織の必要性が神戸で叫ばれるようになった。戦前からそうであったように、神戸における徳之島を含めた奄美の同郷団体は相互に連絡を取り合い、神戸奄美会や奄美連合兵庫県本部のような連合組織を構成してきた。また、既に神戸在住の沖永良部島出身者は戦前から神戸沖洲会という島単位の連合組織を設立し、戦時中の活動休止をはさんで1948年に活動を再開していた。戦後は島単位の団体がなかった徳之島に関しても、神戸における同島出身者全体を包含する組織の設立に、複数の校区会関係者が動き出したのである。

そして間もなく、1974年に神戸徳洲会という徳之島出身者の同郷団体全体を包含する連合組織が結成された。この組織は結成の時点で出身地ごとに12の支部を設置したが、これらはいずれも既存の校区会や集落単位の同郷団体が担うこととなった(表1)。なお、後に神戸徳洲会は同名の医療法人との混同を避けるため、神戸徳之島三町連合会への改称を経て、現在は神戸徳之島連合会という名称で活動している。神戸徳之島連合会は、定期的に年次総会や同郷団体対抗の運動会、そして後述する盆踊り大会などを開催しているが、あくまで既存の校区会など同郷団体の連合組織という位置づけがなされている。

一方で、再び『神戸市統計書』を確認すると、徳之島を含めた鹿児島県から神戸市への人
24)『南海日日新聞』1953年11月11日。

表 1 神戸徳洲会設立時の支部一覧

名称	出身町	地域単位
亀津会支部	徳之島町	亀津小学校校区
亀徳会支部	徳之島町	亀徳小学校校区
神校会支部	徳之島町	神之嶺小学校校区
尾母会支部	徳之島町	尾母小学校校区
母間会支部	徳之島町	母間小学校校区
花徳会支部	徳之島町	花徳小学校校区
山和会支部	徳之島町	山（字）
金見会支部	徳之島町	金見（字）
天城会支部	天城町	天城町
面縄会支部	伊仙町	面縄（字）
目手久会支部	伊仙町	目手久（字）
喜念会支部	伊仙町	喜念小学校校区

出典：神戸徳洲会 [1976]。

口移動は1970年代以降、減少の一途をたどり、1980年には958人と1,000人を切るほどまでに鹿児島県からの転入者は減少した。従って、1980年代あたりから同郷団体への新規会員も減少していく。ただし、1980年代半ば以降の好景気を背景に、同郷者や関連企業などからの寄付がある程度同郷団体に寄せられたことで、同郷団体活動は運動会や定期総会とともに開かれる芸能大会などが盛んに開催され、多くの同郷者が参加する光景が数多くみられたという。

だが、1990年代に入ると会員の減少によって神戸徳之島連合会への役員派遣が困難になる団体も現れ出し、会の役員を務める人の固定化や、若い世代による諸行事への参加の減少が顕著となっていく²⁵⁾。さらには、後述する阪神・淡路大震災後における集住地区の空洞化の影響も加わり、校区会や集落単位の同郷団体自体の運営が困難となり、活動休止や有名無実化する組織も生まれ、1984年時点で12団体あった傘下団体も2019年時点では神戸亀津会、神戸神校会、京阪神花徳会、神戸伊仙町会の4団体にまで減少している。そのため、現在では神戸徳之島連合に参加する天城町出身者の同郷団体が存在せず（図1）、今なお活動している4団体が順に輪番制で同連合会の会長を選任する形式で運営がなされている。

2 連鎖移住と集住地区

ここまでは同郷団体に焦点を当てながら、その活動内容や活動拠点の変遷をもとに集住地区や同郷者ネットワークの様相について確認してきた。本節では、同郷団体が活動の場としてきた神戸市西部の地域に注目し、戦後に同郷団体が発行した諸資料などをもとに、徳之島出身者に関わる空間的な居住分布や集住地区の状況を考察していく。

25) 筆者の聞き取り調査による。



図1 神戸徳之島連合会傘下団体の出身地域

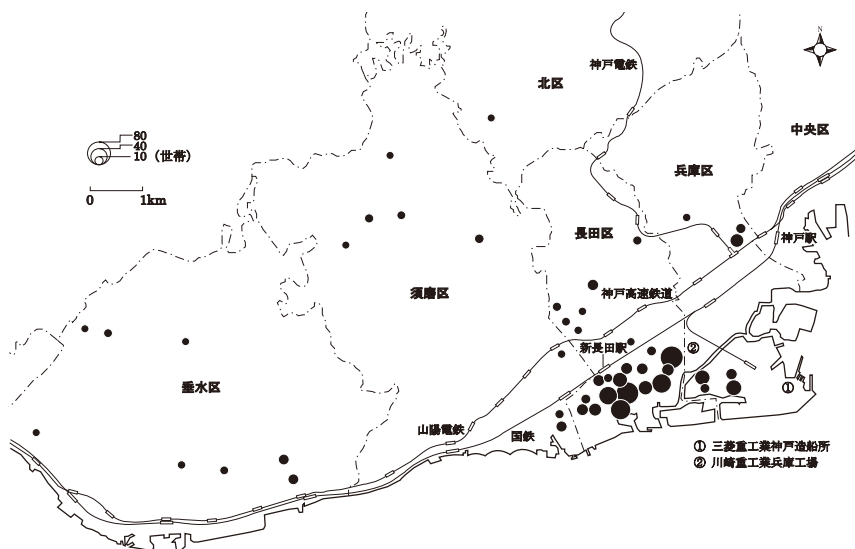


図2 神戸徳洲会会員世帯の居住分布（1984年現在）

注：10世帯以上の町字のみ図示。

出典：神戸徳洲会 [1984]。

図2は、神戸における同郷団体活動が好景気を背景に盛んに行われていた1984年時点における神戸徳洲会会員の居住分布である。これまで述べてきたように、徳之島出身者の多くは戦前期から神戸市の旧林田区に集住していた。この傾向は第2次世界大戦や奄美返還の後も維持され、旧林田区の範囲と大半が重なる現在の長田区と、それに近接する兵庫区や須磨区の南部を中心に徳之島出身者は集住していたことが確認できよう。

(戦前から戦後まで)身内頼りにして、全部出てきたわけよね。そしたら職場がやっぱり溶接工やとか、ゴム会社やとか。そういうところに自分らが頼りにしてきたおじ、おばが、ゴム会社に関係しとう人やったらそこへ行く。ほんで、うちらなんかみたいに川重やら三菱とかにおじやらが居ったときには、そこへ行つとるわけやね。(K氏、1927年生・男性、徳之島町井之川出身)

図2で示される集住地域は、近くに川崎財閥の川崎重工業兵庫工場や三菱財閥の三菱重工業神戸造船所といった工場とその関連工場が立地し、その労働者の居住地となった地域である。加えて、神戸徳洲会会員の居住地と重なる長田区、兵庫区、須磨区の南部一帯は、ケミカルシューズ産業を中心としたゴム関連工場が集中する住工混在地域としても知られている。付近の工場を就業地として、同郷者のつてを介した連鎖移住が、その形成と維持をもたらしたのである。

また、これらの地域は第2次世界大戦後、しばしば「バラック」が密集する地域として認識されていた。それを端的に表す象徴的な事例が、1960年8月27日に長田区西尻池町のゴム工場で発生し、近隣の住宅にまで被害が及んだ火災に関する報道と行政の対応である。

当日の神戸新聞夕刊は、「焼けた現場一帯は終戦後市有地の道路上によせ屋、韓国人などが寄り集まって作った不法建築のバラック街。約三百世帯が密集し、四畳ぐらいの狭いバラックに二、三世帯も同居しており、出入りが激しく長田署、長田消防署も実体ははっきりつかめていない」²⁶⁾と報じている。なお、この火災で類焼した39世帯のうち、29世帯が奄美出身者の世帯で、さらにその22世帯が徳之島町出身者の世帯であった²⁷⁾ことから、現場周辺が奄美出身者、とりわけ徳之島出身者の集住地区であったことがわかる。

焼け出された罹災者は近くの小学校に収容され、神戸市や大阪在住の同郷者からの救援物資の提供などを受けた。しかし、焼失現場は市が計画した幹線道路の予定地であったため、神戸市西部区画整理課の手によって鉄条網で囲まれ、それまで居住していた被災者さえ立ち入りが禁止された。被災者からバラックを再建したいとの陳情もなされたが、結局「焼けた

26)『神戸新聞』1960年8月27日夕刊。

27)『奄美』1960年9月11日号、2ページ。

バラックはいずれも不法占拠で、市としては近く立ちのきを求める予定だったところから、引越料を幾らか出す代わりに、バラックの再建を認めないとする決定を下している²⁸⁾。渋野 [1989] が指摘するように、長田区南部に居住する徳之島出身者の中には、行政がこのように「バラック」、「不法占拠」と認識するような、いわゆる不良住宅地区での居住を戦後も余儀なくされた人々が存在したのである²⁹⁾。

加えて、ここで無視できないのは先ほどの新聞記事中の「韓国人などが寄り集まって」という箇所である。この火災の罹災地域は、実際には徳之島出身者を中心とした奄美出身者の集住地区であったわけであるが、一般的な地域イメージとして朝鮮半島出身者の集住地区として認識されていたことがわかる。本岡 [2019] は新湊川下流域に終戦後に形成された「大橋の朝鮮部落」と呼ばれた地域について、その生成から消滅までの過程を詳細に明らかにしたが、この地域と火災が発生した西尻池町は近接しており、前述した「レンメイ」も歩いて数分の距離である。また、西神戸朝鮮初級学校もここからほど近い新湊川左岸に立地している。徳之島出身者の集住地区と朝鮮半島出身者の集住地区は隣接していたというよりも、むしろ重複して形成されていたというのが、この地域の状況であった。

ただし、近隣に暮らす朝鮮半島出身者との間では、地域社会や経済的な取引を介した個人的な関係性を有することはあるものの、例えば同郷団体が活動の中で朝鮮半島出身者の個人や団体との協働や積極的な接触を行なったり試みたりする事例はほとんどみられない。また、この「レンメイ」付近の一带について、そこへ行けば同郷者に会うことができるという親近感をもって語る徳之島出身者がいる一方で、なかには「スラム」のような場所として否定的に認識し、訪れることを避けていたと語る人もおり³⁰⁾、象徴的な集住地区が同郷者間でも両義的なイメージを抱かせる場所であったことがうかがえる。

多くの徳之島出身者が、戦後も旧林田区南部における集住の傾向を維持したのは、戦前期から引き続き川崎重工や三菱重工などの工場やその下請け工場に勤める人々の定着の結果であった。この歴史的な過程も朝鮮半島出身者の事例とかなり共通性を有していたといえよう。

また、長田区周辺に生活する徳之島出身者の傾向として、主に女性が職工として、多数がゴム関連工場に勤務することも頻繁にあった。元神戸亀津会会長のM氏は以下のように回想する。

女性はケミカル。ゴム屋に働いとるよ。長田の方で。(略) まあ、嫁さんら(奄美出身女性全般の意:筆者注)はゴム貼り、靴貼りとか、ミシン工とかな。そういうのに、一

28)『神戸新聞』1960年8月30日。

29)ただし、渋野 [1989] は、戦後において不良住宅地区に居住していた徳之島出身者の多くは、奄美返還以降に来神した新来者がほとんどであったと指摘している。

30)筆者の聞き取り調査による。

生懸命やとったわけや。(M氏, 1921年生・男性, 徳之島町亀津出身)

奄美返還後, 高度経済成長期まで「とにかく長田に行けば仕事がある」ということが, 神戸在住の徳之島出身者だけではなく, 徳之島に居住するその親類や知人らの間でも共通認識とされていたという。加えて, 履歴書の提出などをせず, 求人への貼り紙を見て「とびこみ」で就業できる手軽さも手伝い, 数多くの奄美出身女性がゴム工場で働き, 中には材料をあずかり, 内職として従事するものもいた³¹⁾。給与形態は日給, または出来高払いが大半で, 特定の工場に長期間勤務するよりも, ロコミでよりよい労働環境を探り, 短期間に複数の工場を渡り歩く労働者も珍しくなかった [市村 1964; 神戸市経済局 1961]。

住工混在地域での徳之島出身者の生活は就業先に近接する形で展開され, 居住地も多くが勤務先である工場群の近くであった。この様態は, 移民が集住し, 工場とその労働者の住宅が混在したインナーシティの典型的な特徴を, 徳之島出身者の集住地区が有していたことを表している。加えて, 図2からもわかるように, 神戸市東部に神戸徳洲会会員の居住分布が偏在しているだけではなく, 垂水区・須磨区の北部や北区などの新興住宅地における居住も少なからず認められた。

3 校区会による居住分布の差異

だが, ここで注意すべき点は, 徳之島出身者の内部にも様々な差異がみられることである。現在も活動を続けている3つの徳之島出身者の校区会, すなわち神戸亀津会, 神戸神校会, 京阪神花徳会について, 同郷団体活動が比較的盛んに行われていた1984年時点での会員世帯の居住分布を示したものがそれぞれ図3, 図4, 図5である。これらを比較すると, いずれも長田区南部周辺に集住がみられるという共通点はあるものの, 校区会ごとに会員世帯の集住傾向に異なる特徴を見出すことができる。

まず, 図3の神戸亀津会は神戸徳洲会全体の空間パターンと類似した傾向を読み取ることができるが, とりわけ長田区南部への偏りが最も顕著である。この地域は前述したゴム関連工場の集積地域であり, それらの製造業への縁故就職や地縁血縁に基づく連鎖移住に伴って集住地区が形成された名残を色濃く示しているといえよう。図4が示す京阪神花徳会の居住分布は神戸亀津会と類似しているながらも, より西部の須磨区南部への集住傾向がみられる。

一方で, 図5の神戸神校会会員の居住分布は, 他の2団体とはやや異なる特徴を有している。より顕著な特徴としては, 最も多くの会員世帯が居住しているのが長田区ではなく兵庫区であり, 兵庫区内の運南地区と呼ばれる兵庫運河以南の地域や新開地駅周辺に集住地区がみられる点が指摘できる。この傾向について, 神戸神校会が発行した『創立50周年のあゆみ』

31) 筆者の聞き取り調査による。

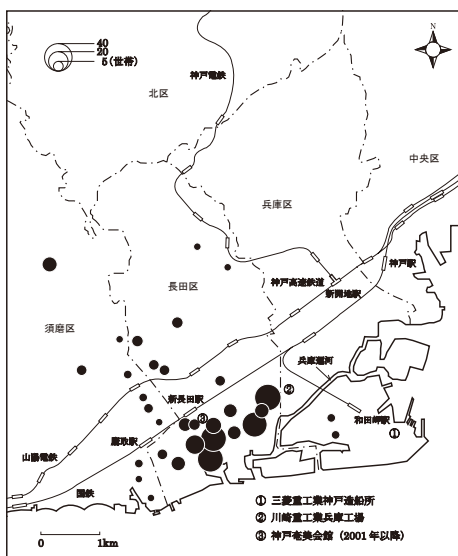


図3 神戸亀津会会員世帯の居住分布
(1984年現在)

注：3世帯以上の町字のみ図示。

出典：神戸徳洲会 [1984]。

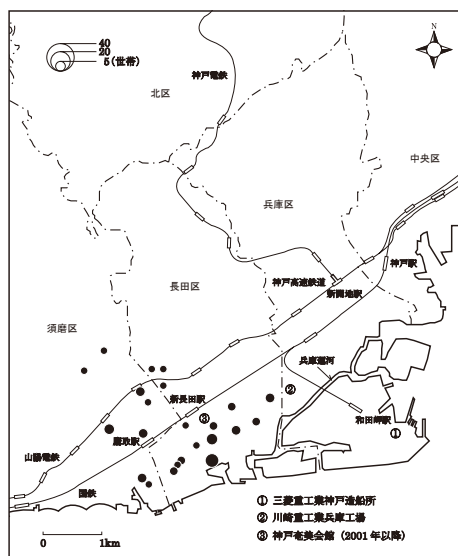


図4 京阪神花徳会会員世帯の居住分布
(1984年現在)

注：3世帯以上の町字のみ図示。

出典：神戸徳洲会 [1984]。

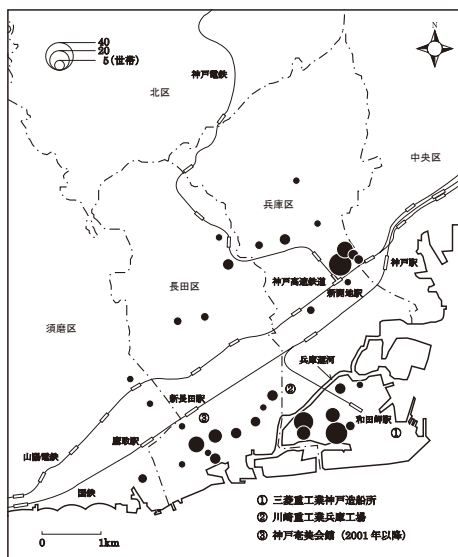


図5 神戸神校会会員世帯の居住分布 (1984年現在)

注：3世帯以上の町字のみ図示。

出典：神戸徳洲会 [1984]。

には「かつて、ふる里を共有する同胞の多くが戦前から運南地区に居を構え、終戦後の食糧不足の深刻なおり、同胞による物資等の配給にあずかりそのころから互助の精神が芽生えていたと思われます」〔神戸神校会 2005: 3〕とある。

運南地区は川崎重工業兵庫工場や三菱重工業神戸造船所に近接した地域であり、長田区南部同様に住工混在地域として、多くの工場労働者が住居を構えた地域である。特定の企業や業種への就業、そして同郷者や血縁者の住居に寄宿するなどして新天地での最初の住居を確保する連鎖移住が、同じ島の出身者においてもより近接性の高い小学校区の違いで空間的な差異がみられたのである。

また、新開地駅周辺の集住については、周辺の福原や西上橋通一帯の歓楽街で店舗を経営する同郷者の存在が、その形成の要因として大きかったという。ここでいう店舗とは、スナックなどに代表される飲食店やブティック、さらには風営法において性風俗関連特殊営業に分類されるものまで多岐にわたる。福原町でスナックを営む F 氏は、その背景を次のように説明する。

(神之嶺小学校区出身の) Q という人がな、最初は(京都の)島原でやとったわけや、戦前は。(略)あの人(戦後に)福原に来て。(略)それでおじさん(Q のこと)がバックで出来たわけや。それからおじさんの嫁が R やから、それがまた呼んで。それから Q と R とで固まるとるわけよ。(F 氏、1931 年生・徳之島町井之川出身、女性)

ここで登場する Q と R はそれぞれ名字であり、最初にこの地域で経営を始めた人物を介して親族たちが同地域で様々な店舗経営に進出していったというのである。ちなみに 1976 年度版の『神戸徳洲会会員名簿』には、この新開地駅周辺で徳之島出身者が経営している店舗について 33 件の広告が掲載されているが、そのうち 31 件が神之嶺小学校区出身者で、さらに同校区の中心集落である井之川集落の出身者の店舗広告が 30 件を占めている〔神戸徳洲会 1976〕。また、前述の血縁関係にある Q 家と R 家の関係者が経営する店舗がそれぞれ 9 件と 4 件となっており、歓楽街での営業を可能とする限定的なアクセス権を地縁、特により近接した血縁に基づくネットワークが媒介していたことがわかる。なお、この地域の店舗経営者らでつくる福原協進会という同業者組織があったが、この団体のメンバーには神戸神校会の会員が数多くいたことから、1980 年代には同会への寄付を行うなど、人的にも経済的にも強いつながりを有していたという³²⁾。

32) 筆者の聞き取り調査による。

IV 磁場としての神戸奄美会館

こうして形成され再生産されてきた集住地区に、徳之島出身者の活動拠点として神戸徳之島会館という施設の建設を目指す声が1980年代に上がり始めた。それまでは奄美出身者のうち沖永良部島出身者のみが神戸沖洲会館という拠点施設を有しており、神戸沖洲会や神戸奄美会の定期総会が開催されていたほか、民謡や琉球舞踊の教室など沖永良部島出身者の文化活動の拠点として機能していた。しかし、徳之島出身者の多く住む神戸市西部には奄美関連の施設がなく、文化活動や同郷団体の会合は個別に公共施設を手配したり、同郷者宅を利用したりするほか術がなかった。そこで、同郷者がいつでも集まることのできる施設を、神戸市西部に建設する計画が動き出したのである。

その資金は当初、徳之島出身者や徳之島の自治体から募った寄付を充てることになったが、より広く寄付を募り、また完成後の施設をより幅広い同郷者に利用してもらうことを期し、徳之島出身者のみならず、奄美出身者全体の施設として建設されることとなる〔神戸奄美会館建設委員会 1993: 27〕。これにより、1987年に神戸奄美会館建設募金委員会が設立され、奄美の全自治体から総額約2,000万円の協力資金の提供を受けるとともに、これに神戸在住の奄美出身者や奄美在住者などからの合わせた1億円余りの寄付金を得るに至った〔神戸奄美会館建設委員会 1993: 39〕。この資金をもとに、1993年、長田区若松町に神戸奄美会館「神戸奄美むつみセンター」が完成した。

こうして徳之島出身者の集住地区にも奄美出身者の常設の施設ができ、同郷団体や文化活動団体の拠点として機能し始めたのであるが、完成からわずか1年半後の1995年に阪神・淡路大震災が発生する。神戸奄美会館は倒壊を免れたものの、近隣で発生した火災に巻き込まれて大きな被害を受けた。また、この震災により奄美出身者全体で約140名、徳之島出身者だけでも40名を越す人々が犠牲となった³³⁾。インフラの復旧などもままならず、不便な避難所生活が続く混乱のなか、神戸奄美会館では同郷者有志による片付けや修復が行われた。さらに、近隣の同郷者へ向けて「奮いたて奄美同胞!」、「君も僕も0からの出発だ 苦難に耐え、がんばろう!」と書かれた垂れ幕が、震災後しばらく会館の正面に掲げられた。後に、神戸市の再開発事業にもとづく区画整理によって神戸奄美会館は長田区若松町内の別の土地に移され、2001年に再建される〔神戸奄美会 2003〕。

だが、震災によって長田区南部一帯が甚大な被害を受けたことにより、周辺の徳之島出身者は仮設住宅や復興住宅、さらには親族宅などへ転居する例が多くなり、集住地区は急激な空洞化を生じることとなる。当然ながら、集住地区での同郷者間の対面的接触の機会も減少していく。

33) 1995年3月19日に神戸市布引中学校にて執り行われた神戸奄美会主催の合同慰霊祭での発表による。

(運南地区の市場で) 会うたらな、神校会あるから、いついつ一緒に行こなって言えるけど、いま出来ひん。(運南地区の) 人が全部変わってしまっ。震災からこっち、遠くへ行ってしまったりとか、子どものそばに行っったとか。家は別々でも子どもの近く家借りたりとか言うんで全然立ち退きになって変わったとかね。ほんま少なくなった。」(H氏, 1932年生・女性, 徳之島町井之川出身)

そこで、神戸徳之島連合会は同郷者を集住地区に再結集させる機会として、震災発生の翌年から8月に盆踊り大会をJR新長田駅近くの若松公園で開催するようになり、この行事は2019年現在も毎年恒例の行事として同公園で開催されている。

しかしながら、震災が同郷団体活動に与えた影響は非常に大きく、会員の高齢化やいわゆる2世、3世といった世代の参加が進まないということも影響して、前述のように同郷団体活動を休止せざるを得ない団体も増えていった。奄美返還後の同郷団体は親睦活動に特化した活動を進め、主に総会、運動会、花見会、日帰り旅行などを校区会や集落単位の同郷団体が定期的で開催する例が顕著であった。

特に、運動会は各同郷団体の行事の中では最も大規模な行事であり、家族連れの同郷者が世代を越えて参加できる機会として非常に重要な位置づけがなされていた。プログラムの中には、若年層の参加を促す役割が期待された子ども向けのレクリエーション競技や親子で参加できる競技が多く組み込まれたり、亀津の浜踊りや井之川の夏目踊りといった出身校区を代表する民俗芸能を、総踊りと呼ばれる参加者全員が飛び入りで踊ることができる形で行なったりと、同郷者の同郷団体への参加促進やノスタルジーを誘うような趣向も凝らされていた。

だが、現在、徳之島出身者の校区会で運動会開催を継続しているのは神戸亀津会のみであり、毎年開催していた神戸神校会と京阪神花徳会はいずれも2013年頃に開催を取りやめた。そのため、連合組織である神戸徳之島連合会が2014年から同郷団体対抗形式の運動会を開催するようになった。また、会務報告などの式典とともに演芸大会が開催される定期総会についても、毎年開催ではなく隔年開催に変更した神戸神校会の例もみられる³⁴⁾。

そうしたなかで、一定の同郷者を集住地区に引き付ける役割を果たしてきたのが、神戸奄美会館で定期的に開かれている島の舞踊や新舞踊、それに三味線や島唄の教室である。こうした演芸関係の教室以外にも、神戸亀津会婦人部や神戸神校会文化部といった同郷団体内部の組織が定期的に舞踊の練習をしたり、茶話会的な集まりを毎週や隔週で開く例もあり、1998年時点では毎月延べ400名の人々が神戸奄美会館を利用していたという³⁵⁾。

34) 筆者の聞き取り調査による。

35) 『月刊奄美』1998年4月20日、南海日日新聞社、3ページ。

表2 神戸奄美会館を利用する主な文化活動団体 (2005年度)

主な活動内容	団体名
舞踊	上野教室 (沖縄舞踊教室), 松下教室 (沖縄舞踊教室), 岡嶋教室 (新舞踊教室) 藤田教室 (新舞踊教室), あじさいの会 (新舞踊・親睦), ひまわりの会 (新舞踊・親睦) むつみ会 (新舞踊・親睦), 神戸亀津婦人部 (新舞踊), カップレ神戸 (かっぱれ)
三味線・民謡	岩代研究所 (沖縄民謡・奄美民謡), 時山会 (琉球民謡・奄美民謡), ばしゃ山会 (シマ唄), 島なんじき (三味線・島唄)
着付	小谷教室 (着付)
親睦	シルバー神校会 (親睦・夏目踊り)

注：団体名の後ろの括弧内には具体的な活動内容を表示しているが、これらは原則として各団体の自称に依拠している。

出典：筆者による聞き取り調査をもとに作成。

表3 神戸奄美会館を利用する主な文化活動団体 (2019年度)

主な活動内容	団体名
舞踊	神戸神校会文化部 (夏目踊り等), 福田琉球舞踊研究所 (琉球舞踊) 藤田教室 (新舞踊), あじさいの会 (新舞踊・親睦), 神戸亀津婦人部 (新舞踊)
三味線・民謡	坂本教室 (奄美民謡)
着付	小谷教室 (着付)

注：団体名の後ろの括弧内には具体的な活動内容を表示しているが、これらは原則として各団体の自称に依拠している。

出典：神戸奄美会館・神戸奄美会 [2018] と筆者による聞き取り調査をもとに作成。

表2は2005年度に神戸奄美会館を拠点として利用していた文化活動団体を示している。鹿児島県指定無形民俗文化財である夏目踊りや三味線を用いて島唄演奏を行なう団体のほか、演歌や新民謡に振り付けをした新舞踊の教室、さらには「沖縄舞踊教室」など、その内容は多岐にわたっている。また、神戸奄美会館の利用者は徳之島出身者に限定されないものの、その設立経緯や立地条件から利用者の大半が徳之島出身者であり、文化活動団体の代表者や指導者も徳之島出身者が多くを占めている。

これらの文化活動団体は神戸徳之島連合会やその傘下団体の定期総会のほか、神戸奄美会や神戸奄美会館が開催する行事の演芸プログラムに出演し、様々な同郷団体の行事運営で重要な役割を果たしている。それに加えて、文化活動団体に参加することが同郷団体活動との接点であるという同郷者も少なくなく、本人や知人が出演するために同郷団体行事に足を運ぶ人も多くみられる。会館を拠点になされている文化活動自体が、同郷者ネットワークの維持や再生産の機能を果たすものとなっているのである [中西 2018]。だが、近年では過去に同会館を定期的に利用していた団体が神戸市内の別の施設を練習拠点に移す例も増えており、会館を直接的に利用する団体は減少している (表3)。拠点を他に移した団体も引き続き同郷

団体の行事には積極的に参加する例がほとんどであるが、文化活動団体が会館との関係を薄めていくことは、同郷団体を核とした同郷者ネットワークの維持や同会館の財政状況を考える上での大きな課題となっている。

おわりに

奄美から神戸への移住とその後の定着過程において、奄美出身者は移住地で他者化される場面に遭遇することがあった。そうした経験は、同郷者の「修養」や「同化」を志向する活動を喚起するとともに、集合的な実践を通して「奄美」というカテゴリーが移住地においても構築されていったのである。また、出身地と居住地が分断された終戦後の激動期には、同郷者への生活支援や奄美の施政権返還を求める運動が同郷団体の再編とともに進められた。この際も、台湾出身者との軋轢や、「沖縄」との差異を強調する復帰運動などの実践を通して、「日本」や「鹿児島県」の一部としての「奄美」、「大島郡」という意識が強化されていったのである。

だが、一方で「徳之島」というスケールで具体的な事例を確認すると、異なる特徴もみえてくる。例えば、神戸徳洲同志会が同郷者の「修養」や「思想善導」を積極的に推進した例は「奄美」全体でみられた特徴の相似形ではあったが、同会を含めた複数の同郷団体が戦前に関与した阪神地方と奄美とを結ぶ航路改善運動は、「奄美」のなかでも周縁性を有する離島である徳之島出身者であるがゆえに顕在化した運動である。また、復帰運動の最中に起きた「二島分離報道」への反応は、出身地がその対象とされたことでこれ以降の神戸における運動を主導していく沖永良部島出身者に対して、徳之島出身者の運動への関わり合いは明らかに温度差を示すものであった。日本という国民国家における境界地の出身者としての特色が極度に表出した戦前期から奄美返還までの時期には、「奄美」としての集合的な意識が構築されていながら、実生活での不利益や親族との分断解消といった直近の問題をめぐる、他の島と徳之島との間でのずれも生じていたのである。

加えて、徳之島出身者内部における差異の存在にも目を向ける必要がある。とりわけ、特徴的なのは先に指摘した連鎖移住に伴う集住地区の形成が、徳之島の中の小学校区ごとに違いがみられた点についてである。これは、より近い地縁・血縁を有する人々が最初期にどこに最初の生活基盤を築いたのかという偶発的な条件によって生じたものと考えられるが、戦前からの集住傾向に加えて、戦後に確保された歓楽街での営業に関わるアクセス権を含めた相互支援によって、集住地区はある程度再生産され維持されていったことを示している。

しかしながら、高度経済成長期以降は神戸への徳之島出身者の流入が減少したこともあり、同郷団体の会員の高齢化と固定化が進んでいく。さらに、追い打ちをかけるように、阪神・

淡路大震災の甚大な被害を集住地区は経験した。そうした中で、徳之島出身者のネットワークの紐帯として、また同郷団体の行事の運営に不可欠なものとして、重要な位置を占めている文化活動団体の存在が浮かび上がってくる。興味深いことに、文化活動団体の中には「沖縄」をイメージさせるものを含んでおり、同郷団体のイベントで徳之島の舞踊である夏目踊りや浜踊りとともに、「沖縄舞踊教室」を標榜する団体が演じるステージも、観客である徳之島出身者がノスタルジーに浸る装置としての役割を果たしている。また、奄美をモチーフとした新民謡をバックに演じられる新舞踊も、同様の効果を有している。

以上見てきたように、ホスト社会から受けた生活習慣に基づく偏見や他者化の経験は、奄美出身者にとっての極めて重要な外的要因として、日本「本土」やその都市空間と換言することも可能な神戸への同化を志向させた。その延長線上に「本土復帰」を目指す第2次世界大戦後の運動をみることができる。近年、奄美出身者の都市への同化は進み、相互支援のための集住は薄らぐ傾向にある。この状況は樋口 [2005] が整理した移民ネットワークの形態における「労働者コミュニティ」の典型的な特徴を示すとともに、当初の同郷団体が目指した「理想」の姿であったといっても過言ではない。だが、それは同時に同郷団体への関与を希薄化させる要因ともなる。今日ではいかに若年層をはじめとする同郷者を団体に関わらせるかが、多くの同郷団体の課題となっており、シンボリックな文化イメージがそのために利用されているのは、その対応策の1つである。

このように、神戸における徳之島出身者のネットワークの様態は複雑に変容してきた。その過程において、同郷者ネットワークの基盤となる領域は必ずしも固定されたものではなく、ある時は奄美全体であったり、またある時はそれぞれの出身の島や市町村、集落であったりとスケールを変えながら同郷団体の活動は展開されてきた。また、その際には、「ヤマト」や「沖縄」、さらに「沖永良部島」など他の島々との協働や対抗など、状況に応じた相互作用がみられたのである。

そして現在では、同郷団体や関連する文化活動団体の日々の活動自体が同郷者ネットワークの維持と再生産の機能を果たし、対面的関係の紐帯としての役割を有しているのである。これは地縁に基づく同郷団体が出身地での対面的関係性の延長というよりも、神戸で出会った同郷者が当地で構築、維持していった対面的関係性を基盤としているといった性格が強い。単なる「奄美」や「徳之島」というカテゴリーに回収される存在としてではなく、あくまで神戸という移住地を基盤、または「ホーム」とする生活経験を前提として、徳之島出身者の同郷者ネットワークと生活世界は位置づけられるのである。

謝 辞

本研究にあたっては神戸奄美会や神戸徳之島連合会の関係者をはじめ、関西にお住まいの奄美出身者の方々より多大なご協力を賜った。この場を借りて深く感謝申し上げたい。なお、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究）「脱工業化にともなう都市マイノリティ層のコミュニティ変容に関する地理学的研究」（研究代表者・中西雄二，研究課題番号18K12584）の助成を受けた研究成果の一部である。

参 考 文 献

鯉坂学

2009 『都市移住者の社会学的研究——『都市同郷団体の研究』増補改題』法律文化社。
奄美大島日本復帰協議会（編）

1953 『大島郡全諸島完全復帰兵庫県協議会資料』奄美大島日本復帰協議会。
安斎伸・指田隆一・濱名篤・小島清志・田島忠篤・平田周一

1981・1982 「出郷者の移動形態と母村の変容」『上智大学社会学論集』6・7: 58-102。
市村智孝

1964 「扁平の指——神戸ゴム街の生態」『歴史と神戸』3(2): 2-13。

稲津秀樹・本岡拓哉・中西雄二・野上恵美

2013 「神戸長田の記憶風景を描きなおす——まちかどの共在する記憶へ／から」『生存学』6:
298-318。

大橋愛由等

2005 「“阪神”の復帰運動に至る奄美出身者の慟哭」『奄美戦後史——揺れる奄美，変容の諸相』鹿児島県地方自治研究所（編），15-40 ページ，南方新社。

川村清志

2015 「移動する身体と故郷の物語の行方——移動によって見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷」『国立歴史民俗博物館研究報告』199: 143-169。

神戸奄美会（編）

1983 『奄美復帰 30 周年 神戸奄美会記念誌』神戸奄美会。

1990 『神戸奄美会創立 60 周年記念誌 奄美』神戸奄美会。

2003 『有限責任中間法人「神戸奄美会館」沿革史』神戸奄美会。

神戸奄美会館・神戸奄美会（編）

2018 『一般社団法人神戸奄美会館設立 25 周年記念誌 奄美はひとつ』神戸奄美会館・神戸

奄美会.

神戸奄美会館建設委員会 (編)

1994 『神戸奄美会館竣工神戸奄美むつみセンター誕生記念誌』 神戸奄美会館建設委員会.
神戸市経済局 (編)

1965 『神戸市ゴム工業実態調査報告書』 神戸市経済局.
神戸神校会 (編)

2005 『創立 50 周年のあゆみ』 神戸神校会.

神戸徳洲会 (編)

1976 『神戸徳洲会会員名簿』 神戸徳洲会.

1984 『創立 10 周年記念会員名簿』 神戸徳洲会.

小林多寿子

1986 「都市のなかの『ふるさと』——京阪神芝会の日」 『年報人間科学』 7: 17-35.

1987 「〈都市化〉とノスタルジー——都市における奄美出身者の心性」 『年報人間科学』 8:
23-40.

1994 「合成された『ふるさと』——都市における同郷者集団」 『組織とネットワークの社会学』 宮本孝二・森下伸也・君塚大学 (編), 119-130 ページ, 新曜社.

渋谷純一

1987 「島からきた人々」 『月刊南島』 147: 326-360, 海風社.

祖父江孝男

1969 「日本における同郷人の結合様式——県人会の比較研究」 『年報社会心理学』 10: 4-19.

田島康弘

1990 「奄美出身者の動向と東京における Segregation の形成——喜界島小野津の例を中心に」 『鹿児島大学教育学部研究紀要』 41: 67-91.

1991 「関西における奄美郷友会の実態——徳之島出身者の各集落郷友会に対する調査から」 『鹿児島大学教育学部研究紀要』 43: 1-19.

戸邊秀明

2008 「ポストコロニアリズムと帝国史研究」 『日本植民地研究の現状と課題』 日本植民地研究会 (編) 55-88 ページ, アテネ社.

富山一郎

1990 『近代日本社会と「沖縄人」』 日本経済評論社.

中西雄二

2007 「奄美出身者の定着過程と同郷者ネットワーク——戦前期の神戸における同郷団体を事例として」 『人文地理』 59: 172-187.

2008 「奄美出身者と同郷者メディア——エスニック・メディア研究との関連で」『人文論究』
57(4): 65-85.

2016 「奄美出身者の組織化と領域的アイデンティティ——神戸における終戦から復帰運動
までの事例をもとに」『文明研究』 35: 1-30.

2018 「同郷団体活動の変容と文化的表象——神戸における奄美出身者の事例をもとに」『文
明研究』 37: 25-47.

西村雄郎（編）

2006 『阪神大都市圏における都市マイノリティ層の研究——神戸在住「奄美」出身者を中
心として』社会評論社.

西村富明

1993 『奄美群島の近現代史——明治以降の奄美政策』海風社.

樋口直人

2005 「エスニシティの社会学」『新・国際社会学』梶田孝道（編），24-42 ページ，名古屋
大学出版会.

福田珠己

2008 「「ホーム」の地理学をめぐる最近の展開とその可能性——文化地理学の視点から」『人
文地理』 60: 403-422.

前橋松造

2004 『金十丸，奄美の英雄伝説——戦火をくぐった疎開船の数奇な運命』南方新社.

松本通晴

1969 「西陣機業者の地域社会」『社会学評論』 36(1): 1-31.

松本通晴・丸木恵祐（編）

1994 『都市移住の社会学』世界思想社.

水内俊雄

2001 「大阪市大正区における沖縄出身者集住地区の「スラム」クリアランス」『空間・社会・
地理思想』 6: 22-50.

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹

2008 『モダン都市の系譜——地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ出版.

本岡拓哉

2019 『「不法」なる空間にいきる——占拠と立ち退きをめぐる戦後都市史』大月書店.

Blunt, Alison

2005 Cultural Geographies of Home, *Progress in Human Geography* 29: 505-515.

2007 Cultural Geographies of Migration: Mobility, Transnationality and Diaspora,

Progress in Human Geography 31: 684-694.

Conradson, David and Latham, Alan

2005 Transnational Urbanism: Attending to Everyday Practices and Mobilities, *Journal of Ethnic and Migration Studies* 31: 227-233.

Urry, John

2002 Mobility and Proximity, *Sociology* 36: 255-274.

[参考資料]

『奄美』奄美社.

『神戸新聞』神戸新聞社.

『月刊奄美』南海日日新聞社.